

芸術・スポーツ

keyword

- 図画工作・美術
- 乳幼児の造形表現



**村田 透**  
Toru Murata

教育学部  
准教授

**【プロフィール】**

- ・1998年 岩手大学教育学部卒業
- ・2000年 上越教育大学大学院 学校教育研究科修了
- ・2000～2005年 学校法人ねむの木学園 ねむの木養護学校教諭
- ・2005～2007年 社会福祉法人きぬがさ福祉会 指導員
- ・2007～2012年 富山福祉短期大学 専任講師
- ・2012～2016年 大阪大谷大学教育学部 准教授
- ・2016年～ 滋賀大学教育学部准教授。

**【主な社会的活動】**

- 所属学会
  - ・大学美術教育学会
  - ・美術科教育学会
  - ・日本美術教育学会
- 委員
  - ・滋賀県美術教育研究会 顧問

**【主な著書・論文】**

- ・子どもの造形表現活動における課題探究について(2018)
- ・「造形遊び」の題材における幼児の造形表現過程に関する研究(2016)
- ・『美術教育概論(新訂版)』(日本文教出版 2018) 共著

**【代表的な研究テーマ】**

- 幼児期や学童期における探究活動としての「造形遊び」
- 子どもの「生きる力」を育む教職員の指導、援助

課題解決に役立つシーズの説明

小学校図画工作科の「造形遊び」は、人間本来の主体的な営みである遊び(遊び性)に着目し、材料や場所と直接かかわり、働きかけていく過程を大切にしたい造形活動である。

「造形遊び」は昭和52(1977)年改訂の学習指導要領で小学校低学年の学習内容として新設されて以降、平成10(1999)年改訂に至り小学校全学年に広がる。「造形遊び」に関する研究は、子どもの自己実現や遊び性に関する理論研究、カリキュラム・評価の研究、造形行為の質的研究等がある。小学校での「造形遊び」は、以下の問題を抱えており、図画工作科「絵や立体、工作」に比べて実践率が低迷している。

【「造形遊び」実践が抱える問題】

- ① 国の行政及び国立教育政策研究所は、学習指導要領等の発信に対して、現状の把握(特に造形遊びを取り上げた実態調査)が十分ではない。
- ② 学校現場は「絵を中心とした指導の文化」や「各種公募展などへの作品出展との関係」が根強い一方、「造形遊び」は作品として残らない場合が多く、敬遠される傾向がある。
- ③ 教科書題材の問題(大量の材料が必要な内容や屋外での大掛かりな内容が多い)。
- ④ 学校の校内研究・研修や教員養成校での課題(「造形遊び」を取り上げる機会の少なさ)。

【「造形遊び」研究の課題】

- ① 授業困難な原因の背景に、教員による子どもの学習過程の読み取りや評価の困難さがある。これまでの質的研究が明らかとしたのは、表現行為や意味世界の多様性である。
- ② これまでの題材開発研究や質的研究は、ダイナミックで大掛かりな内容が多く、学校現場での持続可能な授業実践に資する内容とはズレが生じている。
- ③ これまでの主な研究対象は小学校領域である。一方、保育現場は砂場遊びや積み木遊び等の「遊びの場」における造形的表現活動(以降、幼児期の「造形遊び」と記す)を日常的に実践しており事例が豊富であるが、幼児期の「造形遊び」研究は極めて希である。
- ④ 現学習指導要領や2017年改訂学習指導要領で重視する幼小連携・接続に関して、カリキュラム・題材開発の研究が中心であり、学習過程の質的変遷や連続性を明らかとしない。

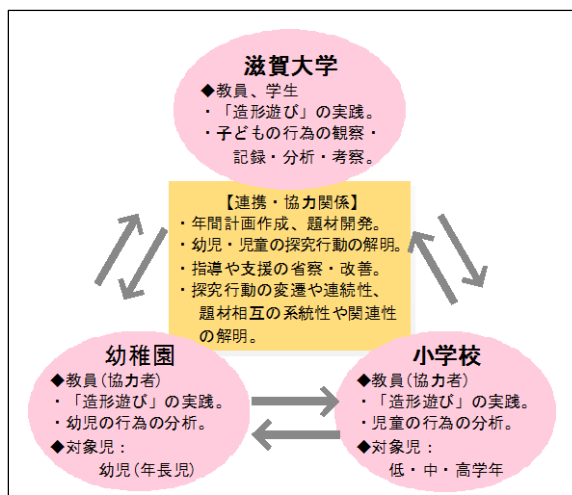
【本研究の目的】

- ① 幼児期や児童期の「造形遊び」における探究行動特有の学習過程を明らかにする。
- ② 幼児期から児童期を通じた探究行動の質的変遷や連続性を明らかにする。
- ③ 「造形遊び」題材に特有な探究行動、および題材相互の系統性や関連性を明らかにする。

【本研究の学術的独創性と創造性】

- ① 本研究の対象児が幼児期から児童期を通じた子ども(5歳から12歳まで)であること。
- ② 「造形遊び」における探究行動(問題発見・解決)特有の学習過程を可視化する質的研究であること。
- ③ 幼児期から児童期を通じた学習過程の質的変遷や連続性を明らかにできる研究チーム(教員養成系大学：大学教員・学生、学校教育現場：幼稚園・小学校の教員)であること。

【研究チームイメージ図】



企業・自治体へのメッセージ

小学校や幼稚園における「造形遊び」の題材開発や子どもの学習過程(問題発見、問題解決)の可視化に関する共同研究を希望します。